

炎の人 三好十郎



河出文庫特装版

— 傳小ホッゴ — 人の炎

昭和三十一年三月三十日 第一刷發行

定價 八拾圓

著 者

三 好 十 郎
み よし じゅう ろう

發行者

東京都千代田區神田小川町三ノ八
河 出 孝 雄

印刷者

東京都千代田區神田錦町三ノ二六
小 笠 原 秀 雄

發行所

株式會社

東京都千代田區神田小川町三ノ八
河 出 書 房

振替口座東京一〇八〇二

秀好堂印刷 落丁本・亂丁本はお取替え致します

河 出 文 庫

77

炎 の 人

—ゴッホ小傳—

三 好 十 郎 著

目次

1 プチ・ワスムの小屋	六
2 ハアグの畫室	三四
3 タンギイの店	七〇
4 アルルで	一二六
5 黄色い家で	一三一
エピソード	一五五
あとがき	一七三
解説（平田次三郎）	一七六

炎

の

人

——ゴッホ小傳——

1 プチ・ワスムの小屋

ドス黒く、貧寒なガランとした室の、奥の窓から差し入る日暮れ前の光の中に、四人の人間が押しだまつている……。

……

アンリ ……ヴェルネ、もう、なん時ごろだろう？（こわれかけた椅子にかけている。右腕が肩のつけ根から無い）

ヴェルネ そうさな……（これは中央の板椅子にかけて、火の消えたパイプをくわえている。窓の方を見て）そろそろ五時半と言うところかな。

アンリ だつて、まだこんなに明るいぞ。

ヴェルネ 天氣が良いと、こうだ。これで、あと二十分もして、おてんとさんが、ボタ山の向うに入ると、いきなりバタツと眞暗になるやつだ。

アンリ でも、五時の交替のボウは、まだ鳴らねえぜ？

ヴェルネ 二、三日前から、ワイスの奴あ、ボウ鳴らすの、やめてるよ。

アンリ あ、そうだつけ。畜生め、ボウぐらい鳴らしてくれだつて罰は當るめえ。

ヴェルネ だけだよ、アンリ、ボウは交替の合圖だあ。こうなつて、お前、交替もヘツタクレも無えんだから。

アンリ そらそうだけだよ、景氣が悪くつて、それで無くても氣がめいりそうだからよ。

ヴェルネ 炭車も昇降機も停つちやつてゐるしな、ボウだけのために釜に火を入れるの無駄だつてバリンゲルさんが言つたそうだ。

アンリ ……ちしようめ。

デニス たまらねえ！ 俺あ、たまらねえ！ 俺あ——（これは先程から片隅の床の上にじかに置かれた藁のベッドのはじめに腰をおろして、兩手で頭をかゝえこんでいた男。低い、すゝり泣くような聲で言いだす）十日前まで、炭車や昇降機はガラガラ、ガラガラ唸つてた、ボウも鳴つてたし、誰かが怒鳴つたり、歌つたりよ（立ちあがつてイライラと床の上を歩きだす）……それがよ、こうしてみんな聲も出さなくなつて、犬も吠えねえんだ。山中がシーンとなつてしまつて、もう十日だ。

ヴェルネ デニスよ、まあまあ落ちつけ。

デニス ……（ガラリと窓をあける。窓の向うに、黒く静まり返つた坑口近くの風景の一部が見える）見ろよ！ 人つ子一人歩いて無え。あんまり静かで、俺あ耳ん中がワンワン、ワンワン

言つて、氣が變になりそうだ。

アンリ そりやお前、ストライキだから、しかたが無えよ。

デニス だからよ、俺の言うのは、そのストライキがよ、こんなザマで、この先きどうなるんだと言つてゐるんだよ。會社じや、俺たちが黙つて言う事を聞かないようなら、四坑とも閉鎖すると言つてゐるし、今となつちや、ワスム中の百軒あまりの家で十サンチームと金の有るところは一軒も無えんだよ。食えるものと言えば、木いちごや草の根はおろか、猫や鼠やトカゲからひきがえるまで取つて食つてゐるありさまだ。

アンリ だつてお前、そりや、そうなつて來たんだから仕方が無えよ。ストライキと言やあ、まあ戦さみてえなもんだ。つまりが戦さなんだから、事と次第に依つちや、ワラジ蟲だつて金くそだつて食わなくつちやならねえ。それが嫌なら、はなつから戦さあ始めねえことだ。

デニス 嫌だと誰が言つてゐるんだ！ 俺も最初からストライキをおつぱじめる事を言い張つた人間だ。たかがこれしきの事にヘコタレはしねえ。俺の言うのはな、こんなありさまになつて來てゐるのにだ、こうして俺たちあ、ベンベンとして坐つていていゝのかつて事だ。いゝかよ？ ヴェルネは俺たちの坑夫頭で、まあ大將だ。アンリ、お前と俺とは組合の四人の代表の中の二人だ。言つて見りや、責任がある。俺たちがこゝんとこで、どんな手を打つかで、ポリナーデュ百二、三十人、家族を合せりや四百人からの人間が、生きるか死ぬか、どつちかに決るんだ。だろ？ その三人が、こうしてお前、三時間も四時間も、こんな、宣教師の小屋なんぞに坐

つたつきりで待っているんだ。これでいいのかよ？ それを俺あ――

ヴェルネ まあまあデニスよ、お前はそう言うが、此處の先生は俺たちの事をしんから心配して掛け合いに行つてくだすつてゐるんだぞ。

アンリ そうよ！ それはまちがい無えぞ！ 先生の事をおかしな風に言う奴あ、俺が承知しねえ！ こねえだの爆發の時だつて、こゝの先生が身の皮あ、はぐようにしてよ、三日三晩いっすいもせず、食うものも食わねえで、まつ黒になつてケガにんの看病したなあ、デニス、お前だつて見ているんだ！

デニス しかし、そいつは宣教師としての務めとしてしているまでじゃねえか。あゝしてさえ居りや、傳道教會からチャンチャンと月給が送つて来るんだからな。なんの心配もありやしねえ。それにとゞのつまりが、お坊さんだ。説教は出来るだろうが、會社に行つて何が言えるんだな？ 今どきお前、坊主の説教ぐれえで、はい左様でございますかと、こつちの言い分を聞いてくれるような支配人かよ、あのバリンゲルの畜生が？

ヴェルネ そこは何ともわからねえぞデニス。バリンゲルの旦那あ、そんなに話のわからねえ人でも無え。俺あ知つてゐる。まあ、おつつけ此處の先生も戻つて来るよ。萬事はそれからの事だ。

デニス とつつあんは氣が永過ぎるよ。年い取つてすこしボケた。

アンリ やいやいやい、デニス、お前、まだワッパのくせに、とつつあんに向つて口がすこし過

ぎやしねえか？ お前の考えるぐれいの事、ヴェルネが考えてねえと思うか？ 俺たちが、じかにお百度を踏んで掛け合いに行つても會社じや、こつちの言い分はまるきり聞いてはくれねえ。この四、五日は勞務の連中も俺たちに會つてもくれなくなつた。それでこゝの先生が見るに見かねて支配人に會つて話してやろうと出かけてくださつたんだ。物には順序と言うものがある。それをよ、そんなにイライラと氣を立ててよ、ヒステリイ犬が狂いまわるような事しては、何もかもぶちこわしたと思ひから、腹の蟲おさえおさえて我慢してるだ。俺にしたつてそりだ。見ろこの腕を。（ダラリとさがつてゐる左袖をゆすつて見せる）炭車のウィンチに持つてかれて、こうだ。俺あ、この腕にかけて言つてゐるんだぞ。てめえ一人で何もかもひつちよつたような事言うのは、なまいきだぞ。

デニス 何がなまいきだ！ へつ、俺だつて、こゝの（と自分の瘦せた胸を叩いて）ヨロケにかけて言つてんだ！ 毎朝々々吐き出す血ヘドにかけて言つてんだ！ これ、誰のせいだ？ え、何のせいだ？ それを――

ヴェルネ まあまあ、まあまあ、氣い立てるな二人とも！ わかつてるよお前たちの心持あ。なあデニス、俺あ、まだお前が生れねえ前からポリナーデュで炭い掘つてゐるんだ。ハハ、百も知つてるよ、そつたら事。まあ、いゝて。今となつちや、ワスム中の人間、誰彼なしに腹んなかあ同じだ。なあ、このバコウのおつ母あにしたつて――（と、片隅の椅子に、三本の大ローソクと紙包みを大事そうに握つて黙々としてかけてゐる老婆をあどでさして）よそ見にやケロリ

として坐つてゐるが、亭主のバコウはヨロケで取られ、上の娘はチフスで取られ、今度は又一人息子のシモンが爆發で死んで、死骸もあがらねえ。それでも、こうして生きてるんだ。つれえのは自分一人の事じゃ無えぞ。みんな、泣くにも泣けねえ心持をこらえながら、やつてるんだ。（老婆は石つんぼだが、自分の事を言われている事に氣づき、三人を見まわしている）

デニス　だからよ、だから、そんなお前、そんな事が、俺たちのせいだよ？　こんなひでえ目に逢うのが俺たちの――

ヴェルネ　俺たちのせいじゃ無えよ。だから、そこんどこをどうやつて行けば俺たち坑夫が生きて働らいて行けるか、そいつをしつかりやつてつて見ようと言うのが俺たちの仕事だ。下手にジタバタすると、出来ることも出来そこなつて、俺たちみんな死に絶えるぞ。

アンリ　まつたくだ。ハッパ、ぶつばなすなあ、いつでも出来る。大事な事あ、炭の筋に當るよりにハッパをチャンと仕掛けることだ。なあ、そうだろ、バコウのおつ母あ？

老婆　あん？

アンリ　（老婆の耳のそばへ）このなあ、ポリナーデュ中の人間の命がよ、俺たちの肩にかゝつてゐるからなあ、めつたな事でかんしやくを起しちやいけねえよなあ！　そうだろ？

老婆　そうだそうだ。此處の先生におたの申そうと思つてよ。町の教會までは、おらの足じや行けねえからなあ。

老婆 こゝの先生、間も無く歸つて来るかね？

アンリ まるでこりや、いけねえや。

老婆 (二人が笑うので、自分も齒の一本も無い口をあけてニコニコして)……やつとまあ、こうして、あちこちからローソク貸してもらつてなあ。へへ、今日はお前、死んだシモンの名附け日のお聖人さまの日だからな、お祈りだけでもあげてもらおうと思つてね。

デニス だつて、バコウの小母さん、シモンは爆發で死んだんだぜ、つまり會社のために殺されたやうなもんだよ？ それを會社じや死體を掘り出そうともしねえ、その上、炭坑は閉鎖して、生き残つてゐる俺たちまで取り殺そうとしているんだ。お祈りをあげたからつて、どうなると言うんだい？

老婆 そうだよ、お祈りをあげてやらねえじや、シモンは坑内に埋まつたまゝ、いつまでたつても天國にや行けねえからね。

デニス そ、そうじや無えつてば！ (叫ぶ) 俺の言うのはだな、バコウの小母さん！

アンリ ハハ、駄目だデニス。ソツとして置きなよ。

老婆 ホホ、ホホ、そうだよ、だからね、やつとまあローソクが間に合つたでね。見てごらん、こんな大きなローソクは、死んだ亭主の葬式の時だつて使いはしなかつただから……ホホ。

(ホタホタと喜こんでゐる)

デニス 畜生。どうして此の婆さんは笑えるんだ？

ヴェルネ お前にや、おつ母あが笑っているように見えるかデニス？

デニス だつて笑つてら。

ヴェルネ 笑つてる。泣くかわりにな。……こうやつてお前、六十年、笑つて、生きて來たんだ。老婆 そらだとも。やつとまあ、お祈りがあげられるからなあ。ありがたい事だ。

デニス ……（それを見ているうちに再び頭をかゝえこんでしまふ）

アンリ ハハ、だがそれにしても、あんまり遅そ過ぎるなあ。此處の先生？ どうにかしたんじや無えだらうなあ？

ヴェルネ うむ。

アンリ バリントネルの方であんまりわからねえ話をするんで、喧嘩にでもなつたと言うような

ヴェルネ いや、そんな事も無からう。假りにもお前、宣教師だ。それにあの人の腹ん中が綺麗だつて事は支配人も知つてるよ。

アンリ そりやそうだけどさ、あんな一本氣の人だ。まるでお前、こうと思ひ込むと氣ちげえみてえになるんだからなあ。今月も先月も、自分の月給が送つて來たら、一文残さずそいつでパソを買つて、みんなの家い配つて歩いたりよ、ベッドはウィルヘルムんちの病氣のおつ母あにくれてやつちまつて、自分はこうして藁ん中に寝てる。毛布からジャケツまで、お前、ゴッソリ困つてゐる家にやつちまつて、自分は着たきり雀のあのザマだ。たしか此の五、六日は、身に

なるような物あ何一つ口に入れて無えよ。あんなに瘦せつこけて、ヒョロヒョロして、うまく歩けねえような加減だ。下手あすると、途中でぶつ倒れてやしねえか？

ヴェルネ そうさ、喧嘩よりは、そつちの方かも知れん。もう少し待つて戻らねえようだら、迎えに行つて見るか。

アンリ だけどなんだなあ、ありや全體、どう言うじんかねえ？ わからねえ俺なんぞ。善い人で、お坊さんで、人のために盡すのが仕事だと言つても、どうもこのキツ過ぎやしねえかね？ やる事がよ？ 自分には三文の得にもならねえ——言つて見りやモグラモチみてえな俺たちのめんどろ見るために、お前、この半年の間にまるきり裸になつちまつたぜ、あの人。住む所だつて、こうだ。壁に繪がはりつけてあるから、ちつたあごまかせてるけど、まるでへえ、なあんにも無えしよ、俺たちのどこの家よりも、ひでえよ、こいじや。

ヴェルネ うむ、變つていると言やあ變つてゐる。これまで宣教師もいろいろ來たが、あんな人は初めてだ。自分ではなんにも言わねえから、どんな量見だかさッパリわからねえが、並大抵の事であんなに夢中になつて、お前、俺たち坑夫のために盡すこたあ出来るもんで無え。内のハソナに、いつだつたか、エス・キリストさまのしたのと同じ事を自分はするんだと話して、涙あこぼしていたそうだ。

アンリ へえい、キリストさまと同じ事をね？

ヴェルネ そう言つてたそうだ。俺にや何の事やらサッパリわかんねえ。なんでもブリュッセル

や、そいからロンドンにも居た事があるそうだ。

アンリ やつぱり宣教師でかね？

ヴェルネ いや、なんかこの、親戚の、繪を商つてゐる店に勤めていたそうだがな、うむ。

アンリ 道理で（壁の上の繪を見まわす）こんな繪を持つてゐるんだなあ。

ヴェルネ なんしろ、きとくなじんだ。自分の慰さみと言つちや、時々鉛筆なんぞで繪を描いてるぐれえで、着る物も食う物もあの調子、酒一滴飲むじや無し、何がおもしろくつて、こんな所であゝしてゐるか。

デニス なあに、そいで自分で良い氣持になつてゐるんだい。俺たち労働者を救つてやろうてんで、つまり今言つたキリストと同じ事をして福音をひろめると言うんだらう。汝自らを愛するが如く他人を愛せよか。そいで涙あこぼしたり苦しんで見たりして、良い氣持になつてゐるんだ。へつ！

アンリ また言うかデニス？

デニス なん度でも言わあ。世の中にはそういうおかしな人間も居ると言う事よ。當人は大まじめかも知れねえが、ホントウは道樂だ。第一おめえ、救うと言つたつて、宗教だとか坊さんの力なんぞで俺たちのこんなありさまが、一體全體、救えるかよ？ 冗談も休み休み言うがいゝんだ。俺たちを救えるなあ、俺たちだけしきや無えんだ。それによ、あの人の言う事あ決つてらあ。人はパリだけで生きるものに非ず、貧乏な人間が貧乏の中に福音を信じ祈りに生きてり